

あとがき

ロンドン同時多発テロ

英国では、イラク戦争を *just war* とは思わず、イラク戦争反対の大規模なデモが繰り返されたが、その流れを変える事件が起こった。二〇〇五年七月七日、ロンドン同時多発「テロ」である。二〇一二年のロンドンでのオリンピック開催が決定、サミットも英国でもたれ、再び世界の中心になりそうなあげ調子に経済の好調も加わり、英国は勝利のお祭り気分だった。VEデー・VJデーを目立たせない工夫が戦後六〇周年のために凝らされ、捕虜問題やVJデーに対する報道は急速に減った。

VJデーとVEデーの間を取って、七月四日から一〇日の間、「退役軍人意識化週間」という、退役軍人や元兵士に感謝する催しが持たれた。ポスターには、若い女性の孫と

並ぶ退役軍人の老人の姿が誇らしげに載っている。セントジェイムズ公園では軍人を称える催しが行われ、退役軍人の暮らしを援助する様々なチャリティ団体や組織が案内ブリスを作り人々を呼び込んでいた。公園はまるごと戦争当時の様子を再現する場所になり、戦時の暮らしを再現する小屋や、軍人食、従軍看護婦の暮らしぶりや塹壕など、当時の暮らしを追体験する各種の試みが持たれた。疎開時代の子供の記録も集められ、人々は場に参加しながら戦争を想像した。泰緬鉄道やシンガポール戦線を記念するコーナーも設営され、それまで隅に追いやられていた軍人の位置を高め、リスベクトを払う所作が進んだ。それは当然ながら、フォークランド紛争も湾岸戦争をも含む「称賛」の期間だ。

キングズクロス駅、地下鉄、ロンドン名物の二階建ての赤いバス——朝がた、イラク戦争に怒る人々が自爆攻撃をしかけたロンドン同時多発テロが起こったのは、七月七日、ちょうどこの軍人週間の真ただ中だった。

私は、たまたま、軍人週間の戦争の記憶の継承と、これまで面談してきた人々の意識の変化を知るために、タヴィストック平和公園のまん前のホテルに宿泊していたが、ちょうどその公園の横のガンジー像のそばでバスは爆破され、ホテルに負傷者が運び込まれた。

イラク戦争と第二次世界大戦の重なるイメージ

テディベアを抱えた母子連れたちとホテルの一室に缶詰めになったが、すぐにお茶とサンドイッチが用意されるなど、緊迫した空気の中でも絶対に弱みを見せまいとする英国人の覚悟が垣間見えた。アイルランド問題で「テロ」経験の多いロンドン市民は平穏さを保つことを重視した。一九九五年の時と同じ「Way of Life」を使い、女王は第二次世界大戦の兵士を、〈テロリズム〉と戦い、私たちの生活のあり方 (Our Way of Life) を守った人々として称えた。

翌日から、退役軍人週間は、テロリストと戦う週間の意味をもち、第二次世界大戦で戦った勇士らは「正義の戦争を戦った勇士」として見直され、イラク戦争を是認するための存在になった。過去の「テロリスト」悪はナチスと日本軍、そして現在、どこかに潜むオサマ・ビン・ラディンのグループと狂信者というわけだ。実際、元兵士らは、このあらたなる軍備強化のために使われているにすぎなかった。全国から招待された軍人はホテルに足止めになり、結局、会場までの遠い道のりを、お金を節約するために、歩きつづけた人もいた。そして、熱い日差しの中、救急車が幾度も走った。女王は「女性戦争記念碑」を除幕し、女性たちの戦争参加を讃えた——すべては、もう一度「悪との戦いへ」と動き出したのである。過去の軍の軌跡の痕跡を消した(いろいろな意味で)者、

道をスムーズにした者たちにさまざまな褒章が贈られ、和解完遂が強調された。

だが、イラク戦争の敵の原像が、日本であることを考えるとき、イラン、イラク、北朝鮮が「悪の枢軸国」と呼ばれ、第二次世界大戦の悪が日本だったことを考えるとき、この構図を素直に喜んでいいわけではないだろう。そして、純粹に、和解と相互理解を考えてきた者たちが、いつのまにか、次の戦争を可能にするための構造に組み入れられているのを、看過するわけにはいかない。

戦争をしないこと

これらの「テロと戦った」元兵士、あるいは「過去のテロリスト」とされたビルマ戦線元兵士たち自身の気持ちはどうなのか。ある日本の戦友会の人たちは、会食と戦友との再会の後、酔い、涙を流しながら、両肩に手を掛けながら私に言った。「戦争だけはやっちゃだめよ！ あなたが先生なら若い人たちに教えてよ！ あれだけはダメだよ、やっちゃだめよ！ みんな不幸になる！」。

彼らは戦争の死の実態を知る最後の人々である。自衛隊員派遣が議論されたころ、ビルマ戦線慰霊祭では人々は嘆きの追悼文を読んだ。「小泉さん、誰も戦地に送らないと約束したじゃありませんか」。そして、派遣が決まると「誰も怪我をしませんように」という願いが繰り返された。

英国でも、ビルマ戦線の勝者、コヒマ師団の例祭で夫をビルマで死なせたある老夫人は言った。「空しい勝利だわ」。彼女は夫を偲んで、戦後いくどもビルマの地を訪れた。ポーツマスでのビルマスター支部で、最初は日本人に頑強に反撥し、のちに日本を愛したピート・ネヴィルは、子供たちの手紙を受け取り、日本人もドイツ人も人間だったことを知った。彼は戦時中に、援軍のアメリカ兵士の訓練で装具の指導を誤り、多量に溺死させた事態を目撃したため、ビルマに飛ばされた空軍兵士だった。「戦争に荣誉なんかありはしない」、日本に対する長い敵意が溶けてくるとき、彼はそう繰り返した。「若い人はお互いに会って、そして話して、本当の敵なんて世界にいないことを知らない」と。彼は京都の「戦争と平和」展で日本の子供が描いた自画像の絵ハガキを大事にしていたが、ある日、私にもその葉書に書かれた「平和」という漢字を丁寧に写して、送ってきた。これらの人々には「戦争だけは繰り返さないでほしい」という強い願いがある。彼らが願う「平和」は、今の自衛隊が考える「平和」とは異なることは確かだ。

英国における捕虜団体の現況

英国の捕虜組織の二大団体のうち極東捕虜連合は二〇〇五年夏に解散。式典の説教を担当した牧師は「敵に塩を与えよう。許せないものを許そう」と呼びかけた。皆がアーメンとつぶやく中、ジャック・ブランドは静かに手を組んで目を閉じていたが、くちび

るは動かなかった。戦争記念森林公園で開催された式典の最後には、日本の収容所にいたデイヴィッド・ウィルソン総書記が有名なコヒマの祈りの一節を唱えた、「家に帰ったら伝えてよ、君らの明日のために、僕らの今日を捧げた」と。既に結成されていた捕虜の子供たちの会（COFEPW）が活動を継続、日本の「残虐」行為の数々を展示した捕虜資料館を、式典当日に森林公園に開館した。

日本政府を相手取って訴訟を行ったJLCSAは活動を継続し、今も日本政府に対する個人訴訟の気構えを持ち、ビルマスターからも心情的応援が寄せられている。ティザリントンは「個人補償請求権」に関する研究書を入手し、今後の方法を考えている。彼はサンフランシスコ条約のあとの追加補償請求権を「reopen」するという言い方を認めない。reopenするにはcloseしないといけないが「close」したことはないとの見解なのだ。彼も老いた。だがその怒りと、日本への愛はまだ目のうちに輝いている。「日本政府はわたしが死ぬのを待っているんだろう」彼はいう。そして、確かに、それは待たれている、という気もする。

ABCIFERは、「これ以上のことは日本から来ないのだろう」と覚悟をして解散の途上にある。これもまた日英政府が待っていたことだろう。だが、戦時中に子供だった人々は、まだ、七〇歳ほどである。彼らの心を満足させないまま、時間が過ぎていき、植民地の問題も語られないのは、悲しいことだ。いや、悲しいというだけではなく、こ

のままで将来の日本が危ういと気がかりでさえある。はたして、今後どのようにすればよいのだろうか。

パターンとコレヒドール防衛者の会（ADBC）のレスター・テニー代表は、裁判係争は止めたが、企業と政府の合併の資金でファンドを作り、若者たちの交流基金にあててほしいという望みをもっている。日本の松山から来た日本人学生がある日、彼の家に泊まり、一日のはずが、三ヶ月もいた。日本の息子代わりとなったトオルは自分の結婚式にテニー夫妻を招待して、新婚旅行と一緒に回ったのだという。テニーは、こういう交流があれば過去の過ちは繰り返されないだろう、と思っている。元捕虜の子孫交流財団という彼の願いは、そういう原体験にも基づいている。ADBCは来年解散し、子供たちがそれを引き継ぐ予定だ。

レスターは、平和友好交流計画がアメリカには適用されなかったことに疑問を抱き、自分たちにも作ってほしいと考えている。これはドイツの基金をモデルにしているものだ。これは検討されてよいだろうが、三つ考えるべきことがある。

一つは、敗戦国だけが強制労働の賃金を負担するべきなのか、ということだ。もう一つは、子供がない場合の後継者や、現在、いまこの現在、捕虜経験のせいで身体を痛めてニーズがある人にはどう対応するのか、ということ。そして、一番の問題は、テニー氏のアイデアは「英蘭に資金が出たから、米国にも」ということだが、それでは、英

国の人々がこれで満足したかのような結論になってしまわないだろうかということだ。

日本が隠匿した赤十字物資の返還という意味も持ちえるので、赤十字を通した活動はどうかと尋ねたが、テニー氏は赤十字に対して、アメリカは信頼していない、と言い切った。赤十字は政治的な圧力団体との見方が根強く、会頭が給料をもらいすぎ等の赤十字不信は、アメリカでは歴史が長いようだ。セシル・B・デミル監督の一九一五年の映画『チート』でも、社交界の金満家が、赤十字募金をくすねて投資に使う様子などが出てくる。英国における赤十字のイメージはどうだろうか。日本では歴代の皇后が赤十字の代表を務めるが、赤十字に委託する際は、少なくとも各国の信頼度を吟味してからのほうがよさそうである。

英国の場合も、企業合併資金のアイデアは出されたし、慰労金に日本が拠出する案も提示されたが、日本が「慰労」するのは無理がある。もし搬出するならば、それは弁済金の形、相手の損傷を補うものであらねば対等とはならないだろう。階級意識が強い英国では、慈善やおこぼれを旦那さまにもらうかのような形は回避しなければならないのだ。

いくつかの提案

もし合併の資金を作るなら、いやそれ以外でも、これまでの一〇年間の投資の効果をよく見ながら本当に効果のある使い方をしなければならない。しかも、対象者は亡くならかけているから、できるだけ早い対応が望まれる。具体的には、(A) 真実解明、(B) 被害者の苦痛に対する治療費ほか、(C) 教育、の三つに分けられる。最後にこの三つを検討し、本書を終えたい。

(A) の真真相解明には、実際に何があったかを関係者に語ってもらうことが必要だ。ある程度は南アフリカの真実・和解委員会を応用しつつ、もうこれ以上お互いに責めたり罰を加えない条件の下で、あらいだらい、起こった内容を調査することが必要だ。もちろん日本だけでなく原爆使用の妥当性も含め、これは各国の任務である。そうしなければ戦争問題は他の事象との取引事項に使われてしまう。なお真真相解明には、調査と翻訳費用も必須である。村山資金では、アジア歴史資料センターというWEBアーカイブが作られて好評だがこれに加えて、口述資料、日本側の資料翻訳、また海外の資料翻訳も必須の業務である(ただし戦犯資料裁判なども、非常に文学的表現が多く見受けられるため、国際法・文化領域・相互の翻訳チームには高度な専門家の共同作業が必要だろう)。

いうまでもなく、研究調査は必要である。近頃、牛蒡と木の根の実態なども、日本側と捕虜側双方の聞き取り記録と文書記録の照合で事実が明確になりつつある。ジャックの質問「殴るときに、何を考えていたのか？」という感情面も含め、事例を取り上げ、

徹底した実態調査を手分けして行うことが必要だろう。捕虜問題実態調査研究チームを立ち上げ、各国に残る史資料と、オーラルヒストリーなど口述資料を残すべきである。

口述調査をしてわかることは、まだ幾多の貴重な日記や当時の資料を持つ人が多いことだ。郷土史家も、靖国神社も、帝国戦争博物館も、これらの資料を保存することができないでいる。平和友好交流計画では、アジア歴史資料センターの資料のPDF化が図られたし、今もさまざまな歴史資料の収集が個々の学者によって行われているが、もっと系統立てた調査が必要となる。これらに対する奨学資金が必要となるだろう。だが、個人個人でやるよりも、現在は協力体制が大きく望まれる時代である。

さらに、これらの資料をそろえる場所と管理への費用も見込まなければならない。これだけ英国に投資しながら、実際に、英国の大学では日本研究が先細り、また、BCFGがせっかく作ったロンドン大学の図書館も、日本担当の学芸員がポストを失い、宝の持ち腐れ状態にある。日本学に対する投資は、五月雨的にあるが、しっかりとしたポストの確保を伴った長期的な視野に立った援助は少ない。それどころか、国際交流基金などの英国のブリティッシュ・カウンシルに対応する機関を縮小したりしているのが日本の現状だ。企業の名前のついた講座はどうしても中立性が疑問視されるが、やはりその点では、国際交流基金は中立の信頼性もあるので、この充実はぜひ必要だろう。

(B) については、これまで見たように、民間人の「癒し」は対象がごく僅かだった

こと、また本国の力学を鑑みて、相手に本当の意味で有効な方法を講じたほうがよからう。これまでミレニアムドームや湾岸戦争に用いたお金で、はるかに効果的な信頼を、日本は得ることができたはずだったと考える。不自信を持たれながら、お金だけ出すのは、無駄遣いである。

(C) 私たちが、どういう判断を下すか、謝る内容を考え、確定するためには、教育の試みは必要だ。これまでのように、二国間ではなく、元植民地のことも考えれば、多国間のすり合わせが必要になる。すべての真相を今語ることは無理だが、少なくとも、たとえば庶民の経験を伝え合うことは必要である。そのうえに立つてこそ、子供たちの交流も意味をなすのである。

以上、私なりに必要だと考えることを述べた。これに加えて、最後に、本当に詫びる言葉について考えたい。

あと一度きりですむ「言葉」——こちらが何を詫びるか、どう詫びるかを吟味し、国民の認証のついた、言葉が必要とされる。そして、それを誰の名前で、どう出すのか、またそれを英国の王室のように手紙を送るのかどうか、吟味することが必要だ。これはラスト・チャンスである。私には私の考えがあるが、それは今はおくとして、とにかく、この最後の機会を無駄にしないために、この本の内容が皆様の役に立つことを切に願う。

イラク戦争とクロスする「和解」

一九九八年当時、和解には、軍隊や安全保障のために必要な側面がもとと存在した。天皇訪英当日の五月二七日、ブレア首相はひたすら良好な経済関係を強調したが、退役軍人のデモが抑えられない状況になると「表現の自由を尊重する」としつつ、BBCの特別インタビューにあらたな切り札的名言葉を口にした。これは他のメディアでフォローされることはなかったが、今見ると非常に意義深い言葉だし、退役軍人、つまり英国軍兵士の先輩にとっては、気になる要素だった。それは、こういう言葉だ。「日本は大切なパートナーだ、経済、投資だけじゃない、湾岸戦争でも、ボスニアでも」。和解は戦争の傷を癒すはずで、和解の大切さを一月に橋本首相に説いたブレア首相が、なぜこう言ったのか。「和解」(リコンシリエイション)と湾岸戦争のクロスポイントはどこにあるのだろう。

結論を先取りすれば、現在、自衛隊を世界に派遣するために、和解は便利だったし、和解は成し遂げたことにしなければならなかった。和解は軍事協力のためには取り除くべきつまづきの石だったし、和解活動のもと、現在の自衛隊の活動が英国にも受容される大事な場であった。

日本の民間人の良心的和解推進派は、「和解」は戦争を起こさず、平和と結びつくと固く信じ、そのためにも和解が成功した喜びを伝えるのだろう。だが、英国側における

「軍人同士の和解」は、あらたな軍の協力関係をスムーズにするための目の上のタンコブ的な捕虜問題や、捕虜を応援する退役軍人の敵意解消のためにも必要だった。第二次世界大戦を除いては、日英間には軍協力関係の長い歴史があり、その歴史を取り戻すこと、それが「和解」の一つの国家的役割だった。和解活動・推進家は、知らず知らずに日本の軍備増強のための構造に組み入れられている。

ブレア首相が言うように、湾岸戦争における日本の戦費一三〇億ドルは、貴重な戦費であったし、日本は東洋における、民主主義国で軍事的ポテンシャルティの高い国なのだ。経済パートナーだけでなく軍事パートナーとしても期待されている。その点において、捕虜問題は、早急に解決しなければならない問題だった。

イラク戦争が起こってからは、この戦争を完遂するためにも、「和解」は強調される必要が生じたように思える。なぜなら、現在の兵士の先輩にあたる元捕虜・元軍人が、日本に対して敵対し、怒りを覚えていると、日英、日蘭、日豪の間で、自衛隊と軍隊の協力がしにくいのである。

こうして、過去の軍人の気持ちをなだめる様々な行事が、さらに展開されていた。永瀬隆氏に対する英国政府の感謝状が贈られ、POW研究会が豪日交流基金賞を受賞した翌週からイラク戦線においてオーストラリア軍が日本の自衛隊を護衛しつつ行う共同演習が開始された。受賞者は感謝しつつもこの動きには違和感を覚えた。また、メイリ

ンズ氏の肝煎りで行われた日英和解礼拝は、英国軍の主要駐屯地の伝統的な士官学校サンダーランドで行われ、日本から駐在武官が参加した。「和解」は過去の軍同士の軋轢が解消した印象を強調し、現在の軍の協働をスムーズにする役割を果たし始めたのである。ここ数年の日英間の軍事協力体制は非常なスピードで整ってきている。

当事者たちは善意であっても、全体の構図としては、前の戦争の和解が次の戦争の道を平らかにするという、「戦争だけはこりこりだ」と思う多くの元兵士にとっても、私たちにとっても、本末転倒な事態が起こりはじめたのだ。これは、英米軍にとっても、イラクに対する「戦争という手段による独裁軍事政権の解除」と「民主化」のモデルが日本であるだけに、より一層、皮肉なものとなっている。

なお、この本の文責はすべて著者にある。認識の足りないところなどは、読者の皆様のご指摘を待ちつついったん筆をおくこととする。この書と「和解」の重荷をシェアしてくれたすべての人々に感謝しつつ、本書を平久保氏とデイヴィット・ウィルソン・アイナに捧げる。